

ライプニッツに於ける個體と世界 (承前)

三宅剛一

四

形而上學敘説の中でライプニッツは次のやうに云つてゐる。「神の作用を神が造つた物の作用と區別することは仲々むづかしい。神が凡てのことをすると信する人もあり、神はたゞ神の造つたものに與へた力を保存するだけだと考へる人もある」(敘説八、河野)。こゝで、前の第二節で「ハ」の項としてあげたスピノザの唯一實體の思想とモナッドとの關係の問題が出てくるのである。

多なるものを根本的な一への分有の仕方及び度合ひ、いひかへれば、一を宿す仕方と度合ひの相違に基け、そこから多の成立を考へるといふことは西洋哲學の傳統思想の一つである。これはプラトニズムの傳統と云つてよい。この場合、分有は徹知的なるものへの分有として、見るとかうつすとかいふやうな意味をもたされるのである。

ライプニッツは、彼がはじめた個別的實體の概念を發表した形而上學敘説の第九節で、すべての個別的實體が宇宙全體をそれ獨特の仕方て表出(existunt)することを説いてゐる。即ち、實體はいづれも全世界のやうなものであること、神もしくは全宇宙を夫々自分の仕方て表出するところの、神もしくは全宇宙の鏡の如きものであること、宇宙は云は

實體が存在する数だけ倍されること (Univers est en quelque façon multiplié autant de fois qu'il y a de substances) を説いて居る。こゝでは個と全との關係と多と一との關係とが、多數の個による一つのものゝ表出として考へられてゐる。多くの個は同じものの順次に異なる相關聯した表出として多にしてしかも一の意味をもつ。ライブニッツでは、多の存在そのものはあまり問題とされず、一からいかにして多が出て來るかといふやうなことが原理的に問はれるといふことはなかつた。むしろ多の存在ははじめより當然のこととして認められ、多がいかにして互に一致し調和するか、あるひは多が多でありながらいかにして一つの「世界」をなすかといふ點が中心となつてゐる。

デ・ボルダーへの手紙(一六六九年)の中で、延長のうちに多があることを否定するものがあらうとは信じなかつたといつて、デ・ボルダーの反對を意外としてゐる(八三)。後の手紙(一七〇〇)でも、實體の概念を明確にせよといふ相手に對して、それにしても君は實體がたゞ一つではないといふことを承認するでせう、また一般に通用して居る實體なる語の意味からしても宇宙に多數の實體が存在するといふことを認めるでせう(二二)といふ風に樂觀してゐる。デ・ボルターがしかく容易に之に賛同しないのを知つて、ライブニッツは、はじめて實體が多であることの證示を試みるに至つた(九以下)。^① ショマーレンバッハは、デ・ボルダーとの書簡往復の間に、宇宙が多であることが、ライブニッツにあつて暗黙の前提であつたといふ事實が表明化され、ライブニッツもはじめて相手がこの前提に對して異議を唱へてゐることに氣がついたのだといつてゐる。とにかく、ライブニッツはそこで自分の立場と對立するものが全一性の形而上學であることを認め、デ・ボルダーに對しても、私の見解を承認するかさもなければ全宇宙がたゞ一つの實體であるといふスピノザの説に行くかであると斷じてゐる(五七)。

存在するもの、一と多の問題に關して、ライプニッツの考方がはじめから一方の可能性に偏向してゐることは、彼の好んで用ふる論法のうちに現はれて居る。彼はデ・ボルダーに對して、多くのものに分ち得るものは多くの物から成る、即ちアゲレゲートである。また、部分に分たれ得るものは、その中に部分に分ち得ざるものが存しない限り何等の實在性をもたぬ、それはミニニに含まれる一なるもの(複數)の實在性をもつのみだといふ論法を用ひて居る(II二)。この論法はそれ自身としては何等證明力をもたない。實體を不可分のものとしたとき、擴がれるものは分ち得るが故に實體でなく現象であるといふことは云へるが、この現象的可分性から實體の多を引き出すことは出来ないわけである。

この點でライプニッツの之と類似した論法への疑問はすでにアルノーによつても觸れられてゐる(II一〇六)。デ・ボルダーは正常な推論としては「物體的な塊の中に分つべからざるもの(unitates indivisibiles)を提示することは出来ぬ」とすべきだといふのに對し、物體的なものを實質として、最後の構成要素(prima constituta)として、不可分の統一體(複數)に據りどころを求めなければならぬとライプニッツは論じる(II二)。

不定な多としての部分がたゞ現象的のものであるといふことから、多を否定する連続的な一を實體とする考方にも行けるし、不定性を脱した實體的多へ行くことも出来る。(勿論それは延長の不可分性からの形式的推理としてだけで成り立つことではないが。)ライプニッツのモナッドは單に分割の完成せる極限といふ如きものではない。現象的なるものはどこまでも分たれるが、實體的な統一體は現象の部分ではなくその基礎である(unitates vero substantiales non sunt partes, sed fundamenta phaenomenorum)(II六)。分析は論理的分析にあつても、與へられたものから原理的な

ものへと廻り行くのである。それ故構成要素といふのも物體を合成する最後の部分といふやうなものではない。擴がれるものはそれから合成される(*compositum*)のではなく、それから結果する(*ex his resultat*)のだと云ふ。それにも拘らずさういふ統一體を多と考へる場合、連續の部分への分割の思想が媒介となつて居り、分割の否定よりもむしろその完成——同刻の部分に於いてではなく、分割の進行の彼方に見られる積極的なるものに於ける完成——の方向に實體的なものを認めるのである。デ・ボルダーへの最後の手紙(一七〇六年)の終りに近く次のやうに云つて居る。「連續體は部分の不定な多數を含んで居る。現實なものにあつてはしかし不定なものはない、現實なものにあつてはあらゆる可能な分割はすでに實現されてゐるからである(*in actualibus nihil sit indefinitum, quippe in quibus quaecunque divisio fieri potest, facta est*)」(II)。(III)の點でライプニッツの用語は必ずしも正確でなく、いかに小さな塊(*minima*)の中にも無限の單純實體が入つてゐる(IV)といふやうな云ひ方をもしてゐる。

實在界が互に獨立な多、しかも無限なる多から成り立つてゐることは、かやうにライプニッツの形而上學の出發點に於いて前提せられてゐるのである。それ等は獨立なる多であるが、前一の宇宙を表出あるひは表現するものとして一致し對應する。それで我々はいまこの同一なるものゝ表出・表現といふ點を考へてみなければならぬ。

この表出とか表現(*representation*)とかの思想もライプニッツの創見ではなく前から用ひられてゐる。史家はライプニッツがどこからそれをとり來つたかについて種々に論じてゐるが、彼自身に於てそれが比較酌明かな形で説かれてゐるのは、ゲルハルト版第七卷に収録されてゐる「觀念とは何か」(III) (III)といふ論文である。これは千六百七十年代の終り頃のものであらうといはれて居るが、この論文がこの時代のライプニッツのスピノザ研究と關係がある

だらうとゲルハルトのいつてゐるのは恐らく正しいものと思はれる。ライブニッツは、スピノザの「エティカ」第二部の定義の書きぬきの處に「眞の觀念とは何であるかを説明すべきである云々」と書きこへてゐる(五〇一)。expliciteといふ概念はスピノザでも重要な役目を演じてゐるが、歴史的にライブニッツがそれをスピノザから受けたといふ確證はない。この概念の歴史的な傳承はケーラー、マーンケなどが相當に考證してゐるがなほ將來の研究をまつべきものであらう。たゞ言葉をたゞつて廻つて行くといふやうなことでなく、ライブニッツに於けるこの概念の使用される動機、その思想的聯關といふやうなものを明にした上で歴史的傳承を考へるべきである。その點で例へば敘説二十六―二十八の如きものを重視しなければならぬ。こゝでライブニッツはスコラ哲學の感性形象(*species sensibilis*)の考方を非難し、我々の精神の外から何か入つて來ると考へるべきでなく、形相は我々の精神のうちに含まれてゐることを説いて居る。中世末期の哲學者に於ける感性形象の否定と記號及び代表の説、それと結びついた認識作用に於ける精神の能動性の説の如きも顧慮さるべきであらう、それと共にもとよりルネサンス哲學に於ける大宇宙・小宇宙の思想との聯關も考へられねばならぬ。

① Gerhardt, Philos. Schr. VII. 251-252.

② Ahnke, Leibniz S. 21.

ケーラーの本は私は見てゐない、Kant-Studen 19 に出づる *Selbstanzeige* と、マーンケの紹介してゐるところを知つてゐるだけである。尙、表出・表現の概念については、下村氏の「ライブニッツ」參照。

③ Cf. *Eclaircissement du nouveau système* etc. IV. 495.

河野氏譯、單子論七、註四參照。

① Cf. Dilthey, *Leibniz und sein Zeitalter*. Ges. Schr. III. 60 f.

ディルタイによればノミナリズムの認識論によつて、神と個物との間にあつた中間的存在の實在性が否定せられ、個物の世界が神の展開 (Explication) となり、各個物はそれぞれの場所に於いて全體を表現するものとなつた。この思想はクザヌスからブルノーを経てライプニッツに至つてゐるのであるといふ。しかし考證家は史實的にクザヌスから直接影響されたといふ證據はないとしてゐる。なほクザヌスとの關係については後に論ずる。

「觀念とは何か」といふ論文で、表出する (exprimer) といふことの意味について次のやうな説明がなされてゐる。あるものが、他のもの (それによつて表出されるもの) のもつ總ての状態 (又は條件) (habitus) に對應する (responder) 條件を含んでゐるとき、前者が後者を表出するといふ。表出には種々ある。機械の模型は機械を表出し、平面圖は立體を表出し、話し (oratio) は思想や眞理を表出し、數字は數を、代數方程式は圓やその他の圖形を表出する。表出 (expressio) と表出さるゝものとの共通なものがあるので、表出するものゝ諸條件を見れば表出されるものゝ之に對應する諸性質を知ることが出来る。それ故表出が表出さるゝものに似てゐる必要はなく、條件のアナロジーが保たれてゐさへすればよい。表出には自然的のものと有意的 (intencio) 少くとも一部分有意的のものとがある。言葉や文字は後者で、土地とそれの地圖、圓と之を表はす他の圓又は楕圓の如きは前者である。結果は原因を表出する。各人の所行はその心を表出し、世界そのものはある意味で神を表現する (Mundus ipse quodammodo praesentat Deum)。觀念といふものは思想の作用といふよりむしろ思想の能力なのであるが、我々の中に事物の觀念が在るといふことは、物と心と兩方の創造者たる神がこの能力を我々の心に印刻したといふことに外ならぬ。従つて精神はこの能力の働らきによつて、事物から起り來たるところのものと完全に對應する事柄を (自) の働らきから (自) 引き出すことが出来るのである。

スピノザは、觀念の次序と聯結とは事物の次序と聯結と同じといひ(エティカ、第二部七)、また、延長の様態とその様態の觀念とは、二つの仕方で表現された同一物であるといつて居る(註同)。スピノザでは、人間の精神は思惟の屬性そのものでなくその一定の様態であるが、人間の精神の現實の存在性を形づくる第一のものは觀念しかも現實に存在する個物の觀念である(同、證明十)。さうして個物は神の屬性又は神の力(potentia)を一定の仕方で表出(exprime)するものである(第一部、二五註及、び第三部六の證明)。ライプニッツは人間の精神を様態と考へることに反對し、また觀念を存在するものではなく能力だと考へる。さういふ考からスピノザの平行説を變様して、人間精神を、思惟の全様態を一定のペースベクティープに於いて含むもの(ライプニッツは我々の精神を神の模倣とする)と考へるとすれば、精神と物との平行でなく多對一の對應となる。ライプニッツがエティカの第二部定理十二に附記して「*Totus mundus, quodammodo a quavis mente percipitur. Mundus unus et tamen mentes diversae.*」(T. 137)と云つてゐるのは、*esse*にその關係である。「觀念とは何か」の終りにあけてゐる圓の觀念と圓との關係が、スピノザが「エティカ」第二部七であけてゐる例と全く符合してゐるのも偶然ではない。私がこれをいふのは、ライプニッツの思想が、この點で實際にスピノザから出てゐるといふやうな歴史的關係を主張しようとするのではなく、本質的な思想聯關の上からいふのである。ライプニッツに於いても、精神又はモナッドが外物の直接影響によらずしてしかも宇宙を表出することの可能なる根據は神におかれ、「我々が精神の中にあらゆる物の觀念を持つてゐるのは全く神が我々に及ぼす不斷の作用のためであり、即ち結果が、その原因を表出するからである」(二八)(敘説)と云はれて居る(單子論四七、四八參照)。

ライプニッツはスピノザをもつて、デカルト哲學の一つの徹底であると考へる(I 583, V 590)。スピノザとマールブラン

シユとがデカルトを修正又は徹底せしめたものといへると同じく、ある意味で、ライブニッツの形而上學も同様な關係から考へられる。ライブニッツは自己の立場が機會原因論と同一視されるのに對してしばしば抗議してゐるが、兩者の間に一脈相通するものゝあることは否定し難い。ライブニッツ自身もマールブランシユの思想との一致點を認める。これは、マールブランシユの哲學を論じた *Entretien de Philarete et d'Ariste* (一七一一年)の結末に次のやうに云はれて居るのを見ても解る。「私は神が精神の唯一の直接な、外なる對象だと考へる、神の外に精神に對して直接に働らくものはないのだから。我々の思想は、我々のうちにあるすべてのものと共に、それが何等かの完全性を含む限り、神の連續的な作用の不斷の産物なのである。我々が我々の有限な完全性を神の無限性から受けてゐる限り、我々は直接神の影響の下にある。さういふわけで、我々の精神は、神の中なる諸觀念に對應し之に與かるところの思想をもつ限り、神のうちにある永遠の諸觀念によつて直接影響されてゐる (p. 223) のである。この意味で、我々の精神はすべてのものを神の中に見ると云ひ得るのである (VI 五九三、さちらに VI 五七七) もとよりライブニッツはスピノザに對してと同じ様に、マールブランシユに對しても、我々の精神の獨立性を認めてゐないことを非難する (廿九)。^(被説)。しかし専らこの相違の方面だけを見るときは、ライブニッツの形而上學の眞の根底は不明にならざるを得ないであらう。我々は共通的な方面とライブニッツに特有な方面との結びつきを見なければならぬのである。

人間の精神に完全性の、あるひは積極的なるものゝ存する限り、それは唯一なる、存在と作用との本原をなすものから來るのだといふ思想は永い傳統をもつ。マールブランシユに於ては、人間の知性は全く受動的のものと考へられてゐるので、人間の精神自身が觀念をつくり出すといふことはない。我々の精神を動かしてそこに何かを生ずるものは、

我々の精神よりもすぐれたるものでなければならぬ。それはすなはち觀念であり最後は神である。(Recherche, 61.

par Bailleur, I, 330)スピノザは、神と個物との關係を表はすに、所産(production)、神の本性から出て来る(sequence)。

神の屬性を表出する(exprimare)等の觀念を用ひてゐる。そのうち表出の觀念は「出て来た」もの、その本原への關

係として分有の意味をもつと云へよう(書簡十九ではスピノザは分有と表出とを相關的に用ひてゐる。ゲプハルト版VI九四頁)。スピノザはしばしば、本質(エッセンス)と本性と

力(ポテンチヤ)とを同義に用ひてゐるが、本質をもつことは力としてあること働らくことである。神の本性を一定の仕方であ

出することは、すべてのもの、原因としての神の力を一定の仕方であつて、かゝるものは何等かの結

果を生ぜないではゐない(エティカ、第一部三六)。それ故に個物が神の本性、完全性もしくは力を表出してゐる限りそれは働くも

の、結果を生ずるものである。(ライプニッツは我々の精神が神を表出するのを、結果が原因を表出するものとしてゐることは上述の通りである。)スピノザにあつて、人間も一つの個物であるが、人間の本性も神の屬性の様態たること

ろに存するので、人間の本性も神の本性をある一定の仕方であつて表現してゐる(エティカ、第二部十、系)。神の本質を表現する限りそ

れは働らくものであるが、それが働らくといふときは神の働きに與かる意味に外ならぬ。人間の精神は神の無限な悟

性の一部であつて、人間の精神がこれ又はそれを知覺するといふのは、人間の本質を構成する限りに於いての神がこ

れ又はその觀念をもつことに外ならぬ(同、十、系)。

ライプニッツは、世界に於いて唯一の實體のみがあり、すべての他のものはその様態にすぎぬといふスピノザ説

を免れしめるものはモナッドの觀念の外にはないといふ(ブルゲへの手紙、III五七五)。實體がたゞ一つであるか又は多數の個體實體

が存在するかは、働くもの、作用の主體たるものが唯一か或は「最後の作用者たる神の外にも多數の個別的なる働ら

くもの (quantité d'actis particuliers) があるか」といふことに外ならぬ (唯一普遍精神に關する考察 VI 五三七)。

働らくものが唯一であるか多くあるかといふ場合に、それを唯一とする考は、個物の働らきそのものは認めても、それをたゞ全一的な作用の部分的切面とし、その働らきの中心を個物のうちにおかないのである。個物はどこまでも世界の一部であつて、それ自身獨自の内的統一をもつ二つの世界ではない。しかるに、宇宙の鏡たるものはそれ自身の表現法則をもつものと考へられる。それ故に「生きた鏡」なのである。ライブニッツはモナッドがあるだけコンセントレートされた宇宙 (univers concués) があるのだといふ (Ⅲ五五)。モナッドの中に無数の表象の含まれてゐる有様は、しばしば、中心の一點に無数の線が集中して、そこに無限数の角を形づくるのにくらべられる (「原理」)。モナッドに於ける様相の多様は外にある物への關係の多様 (la variété des rapports aux choses qui sont au dehors) だといはれるが (附) この rapport なるものは能動的・自發的な係はりで、他に對する働らきとしての動的状態の意味を含むものと見なければならぬ。單なる「關係」とかあるひは單に受動的な印象の如きものではない。エピキウロスのアトムは、この關係を缺くが故に眞實に存在するものといへないとライブニッツのいふのはそのためである (一七〇三、バイルの辭書第二版の考察への答、VI 五六二)。

ハの動的な「係はり」が即ち perceptions に外ならぬ (單子論 一五、マ・ホス)。
ハの手紙 II 三一一参照)

働らきの中心と云つても、モナッド相互の間に物理的な作用はあり得ぬのであるから、働らくことは表象することに外ならぬ。作用の中心はそれ故表象の中心、宇宙を表現する特定の立場といふ意味になる。

ところで、さういふ表象する精神が多数であると主張する根據、云ひかへれば唯一の精神實體を排斥する理由はどこにあるか。變化の内在的原理がなければならぬこと、自ら働らくものがなければならぬことを認めたとしても、そ

れが何故にたゞ一つであつてはならぬかは別に考へられねばならぬ。ライブニッツは「唯一普遍精神に關する考察」に於いては、證明の義務はむしろ唯一の精神實體を主張する側にあるやうに論じ、その論據を一々反駁してゐる。その場合前にも云つたやうに、ライブニッツは存在するものゝ多数性を自明的の前提として考へてゐるのである。それでは例へば、普遍的精神を大洋の水にたとへる考に對しても、平然として、大洋は水滴の群集であるから云云といつて居る(三五六)。ライブニッツの自説に對する積極的な理由とみらるものは次の如きものである。第一、我々の精神、思惟し知覺し意欲するものとしての我々は、他の思惟し知覺し意欲するものと異なるものであることを經驗が示す(同、五三七、然そのもの)。次に、異なる人間に於いて相反する思考がなされるとき、唯一の精神を主張するものは、之を異つた、さうして異つた作用をなすところの物質に歸する外ないであらうが、もし物質が作用するとすれば唯一の精神はどうなるのか。また、もし物質が全然受動的のものとするれば、そのやうな相反する思考作用をどうしてそれに歸することが出来るか。第三に、すべてのものに種々の程度(二四五)がある。任意の運動と完全な靜止との間に、堅さと完全な流動との間に、神と無との間に無限の程度の差がある。同様に作用の程度も無限である。しかれば、たゞ一つの作用者と唯一の受動物とだけを想定するのは道理に合はぬ。第四に、物質は神に對立するものではなく、限られた作用者例へば精神又は形相に對立するものである。神は何物も之に對立することなき最高のもので、物質も形相も神から來るのである。受動的なるものは、すでに無よりも以上のものである。何となれば、受動的なるものは何かに役立つ(capable de quelque chose)が、無には何を歸することが出来ないからである。最後に、ライブニッツは個物の持續性といふことをあけて居る。普遍的精神を主張する論者は、我々のうちにあるものは普遍的精神の結果だとする。と

ところで、神の結果 (The Effect of the Deity) は存続するものである。それで、ある程度に判明な表象と一定の諸器官とをもつた生物が常に存続し、従つて神から發する結果がこれ等の器官のうちに保存されるとすれば、それ(その生物)は非物體的で不滅な精神——ある仕方では普通の精神を模倣する精神——であるとすることが何故許されぬであらうか

この論文は個體實體を主張するライブニッツの世界觀的動機をよく示してゐるやうに思はれる。個別精神乃至個物のうちに含まれる完全性あるひは本質性が、すべて神から來ることを認める點で、ライブニッツはスピノザと一致する。しかし一なるものを多様化するところのものをたゞ單なる實在性の缺如とする考方に反して、ライブニッツは、多様なるもの、低き程度の完性をもつものも、そのやうなものとして積極的な存在であるとす。一なるものが多様化されることは、それ等がいづれも眞の一に及ばず、従つて十全な實在でないといふ方面からみられないで、多様化は一なる本質の多くのものに於ける顯現として、異つた多くの *manifestations* があるだけそれだけ神の榮光も倍加される(九敍)と考へる。あらゆる程度の判明性に於ける世界の表出がもれなくつくされ、所謂形相の連續を形づくつてゐる限り、それはむしろ「可能なる限り」の完全性の體現であると考へるのである(四三)。こゝに表白されてゐる思想は有は無よりもすぐれてゐる(〇四三)といふ世界觀的又は價值判斷的断定と同列におかれるべきものであらう。たゞ見逃してはならぬことは、認識論に於いて蓋然的なものに對するライブニッツの見方、即ちそれを確實性の缺乏としてよりも、むしろある程度の、即ち與件に基いて (*ex parte*) 値を定め得る如き積極的な確實性とする見方が之と相應するものだといふことである。

事物をそれが何等かの度合ひに於いてもつて居る完全性といふ側面から、即ちプラスの面からみるといふことは可

能であり、又重要でもある。ライブニッツの見方はそれである。しかし有限物の哲學的認識としてはそれだけでは偏つたものである。ライブニッツも有限な個物を神に對比して考へる場合は、前述の如く、その有限性、無力性を考へてはゐる。しかしネガティブな側面をみる強さはその反對の面を高揚する強さに及ばないことも否定しがたい。そこにライブニッツの、あるひは近代といふ時代の存在感とか世界觀とかを認めることもできよう。スピノザに對比してみて、そこに彼の特有な見方が明白に浮び出てゐる。スピノザも一般概念を單なる抽象とし、個物の自己保存の本性を説くが、個物の本質的な存在性は自己中心的のものではない。存在論の構造としては、神としての實體と様態との外物ものもないといふスピノザに對し、ライブニッツではモナッドと神とにならんで本質的な意味をもつ「世界」といふものが説かれてゐる。この點にライブニッツの重要な特性がある。我々は次に世界といふもの、及びそれとモナッド及び神との關係を考へねばならぬ。それによつてスピノザ的の、及びギリシア末期以來のプラトニズムの思想と、ライブニッツの思想との關係が明かにせられるであらう。

五

モナッドは夫々世界、あるひは宇宙を表現乃至表現するといふが、世界とはいかなるものであるか。モナッドはいづれも各自の觀點から世界を表現するといふ。それで世界の表現は無限に多數にある。これに對して一つの世界といふものがあるか、あるとすればいかなるものであるか。様々の異つた方面からみた同じ都市の眺望をモナッドの世界表現に較べるとき、唯一の宇宙といふものがそこにたしかに考へられてゐる(單子論)。(五七七)

いかなるものであるか。

單子論の六〇節には次のやうに云はれてある。

神は全體を治めながら (regit) 各の部分、特に各の單子を顧みてゐるが、單子は表現的 (representatiu) であることを本性としてゐるから何物も之に制限を加へて事象の一部分だけしか表現しないやうにさせることが出来ない。

尤もこの表現は全宇宙の機微委曲 (intricacies) に到つては混雜であることを免れず、事象全體の僅かな部分、即ち各の單子に對する關係から云つて最も近い物若くは最も大きい物に於いてしか判明である譯に行かない。又さうででもなければ各の單子は神になつてしまふ。つまり單子が制限を受けてゐる (limitati) のは、その對象に於てではなく、その對象を認識する仕方 (la modification de la connaissance de l'objet) に於てである。單子はどれも混雜にはあるが無限、全體に向つてゐる。然しそれぞれ制限を受け、判明な表象の程度によつて區別されてゐる (河野氏譯)。

これによつても分るやうに、多數モナッドの相違は同一宇宙を表現する判明きの程度が多様であることによる。モナッドの被造物としての制限は、その世界の表現又は認識がたゞ一部分だけしか判明でなく、他の大部分に於いて混雜してゐることにおかれる。神に於いては凡てが判明に認識せられる。それで、神は云はゞ到る處中心である (comme centre partout)、その圓周はどこにもない、といはれてゐる通りで、凡てのものは直接神に現前し、中心からの距たりが全くない (原理) (十三) されぞれの立場から世界を表現するモナッドには云はゞ遠いものと近いものといふ本質的な相違が存し、中心と周邊との區別がある。モナッドの宇宙表現の仕方は、各モナッドに特に屬してゐる物體(生物の身體に當るもの)を特に判明に表現し、この物體が宇宙の空間的充實(空間に於ける物質的連續)に基いて宇宙全體を表出

してゐるが故に、精神がその物體を表現することによつて全宇宙を表現するのである(單子論、六二、原理二、ア)。(ルノーへの手紙「普簡二二」)。

各モナッドに表現された世界は、それぞれに遠近法的な判明性の相違はあるが、互に嚴密に對應してゐる。しかしこの對應そのものをたゞちに世界の唯一性と同一視し得るであらうか。ライプニッツの説明の文字通りの意味に従へば勿論さうではない。對應はむしろ同じ世界の夫々の立場からの表現であることに基くのである。各モナッドの表現の對象は同一であるといふが、その同一なるものは何であるか。

ライプニッツによれば世界とは、有限なる物の集まり(*agregatum rerum finitarum*)である(Ⅶ三)。宇宙と世界とは殆んど區別なしに考へてゐるが、(Theod. I 58 参照)ライプニッツは可能な世界及び現實な世界といふ概念を用ひてゐる。「宇宙は共同可能なるもののある種の集合で (*la collection d'une certaine facon de possibles*)、現實の世界は存在する凡ての可能なるものの集まり (*la collection de tous les possibles existans*) である(七五)」。世界に含まれる「物」の數は無限であるが、無限なるものは、ライプニッツによれば、^①全體(*totum*)をなすもの(Ⅱ 104-105, VI 138, Schr. III) これはライプニッツが全體をなすといふことゝその要素の數を定め得ること、或は連續體に於いては、その大きさを定め得ることゝ同一視することによる。Sed sciendum, revera aggregatum infinitum neque esse unum totum, aut magnitudine praedictum, neque numero constare. De essentia numeri, imae et cujuscumque Totius est, esse terminatum (Ⅱ 304) それで、世界はどんな數でも *agregatum* であつて *totum* ではないとせられる。時間空間の如き觀念的なものにあつては、全體が部分に先だつたが、實在的なものにあつては單一なるものが集まりに先だつ (*in actualia simplicia sunt anteriora aggregatis*) (七九) といふ現實存在の構造から云つても、世界は集合である外ない。

① Cf. Schmalenbach, op. cit. fol. f.

「全體」の概念は連續體に於ける場合と非連續的なものに於ける場合とは意味が異なる。後者の場合は全體は composition の性格をもつた定多を意味する。従つてあらゆる單一體の數、——これはあらゆる數の數 numerus omnium numerorum と同じこととなる——が一つの全體をなすこと、即ちそれが定數をなすと考へることは矛盾である（二三三八）。

世界は集合であるとするならば、それはモナッドの集合である外ない。實に單一體といはれるものはモナッドの外にはないのだから。ところで、この集合はいかなる意味で一つといはれるか。「全體」としての一つではない。實體的に世界は一ではなくて多である。世界が一であるといふのは、世界の無限なる成員が悉く「一つのもの」の variante としてあるといふ意味で、即ち一なるもの、部分の多ではなく、多の内容を形づけるものが同一なるもの、たえず變する表現であるといふ意味で一である。この關係は諧調とか對應とかといつたのではまだ十分に表はされない。これ等の關係は一なる世界を形づくるモナッドの關係に比してまだ外的形式的なるを免れないからである。各々のモナッドは夫々一つの小世界で、あるひは全世界の如くに (comme un monde entier) あり、従つて大宇宙は世界の世界といふべきものである。

世界が小世界の世界であるといふとき、我々には無限個の小世界が一つの世界としてある場合の共存の仕方はいかなるものであるかを問はねばならぬ。「凡てのものが神に直接に現前してゐる」といふのであるから、神の知性の「對象」としてあることが、凡てのもの、世界に於ける共存の仕方であるともいへる。しかしその神の知性に於いて「共に」あるあり方と、モナッド相互の聯關に於いてある世界のあり方とはすぐに同一とは云へない。共存の仕方とその根據とは一應區別されなければならぬ。被造物相互の聯結 (Union) 又は適應 (accommodament) の根據は、神がその

やうな世界を選んで創造したことによるといふ(單子論、五)。しかしライブニッツはまた、豫定調和そのものを實體が悉く同一宇宙の表現であるといふことに基ける(同、七八)。それであるから、さういふ相互に適應するモナドの共存の可能根據は神に存ずるとしても、さういふ共存の仕方がどの様なものであるかといふことはその説明だけでは解らない。

ライブニッツは一般的に「集まり」といふことを一つの關係だとし、集合による存在 (things in aggregation) は、ただ心的の統一(一緒に之を知覺する精神のうち)に於ける統一をもつにすぎぬもので、それはたゞ虹の如くに心的の又は現象的存在性をもつのだといつてゐる(情性新論、二卷十二章)。^① ラッセルはこの點を批評して、もし複数が知覺者のうちにもみ存するのだとしたら、多數の知覺者はあり得ず、かくして單子論の全教説はくづれてしまふといふ。これに對しては、モナドが集合であるといつても、それはたゞ共存の仕方の一面にすぎぬので、同じ世界のモナドは内的聯關を、即ち同一宇宙の表現としての内的聯關をもつただから、單なる外的集まりとみるべきではないと云はれるであらう。あるひは、神は多くのモナドの中の一つのモナドではないから、神の精神に係はる(その知性及び意志)に限り、集まりはやはり一つの精神の「對象」としての統一性をもつではないかとも云はれるであらう。しかしそれでは問題はやはり元にもどつたまゝである。

① J. Russell, op. cit. 117.

① エルドマンの如く單子相互の關係を反撥、あるひは排除的活動にありとするのは一つの面白い見方で、モナドの獨立性といふことに適した關係と考へられる。しかし Reunion といふことも、之を論理の概念として考へるなら知らず、力に關係せしめて存在的に考へるとすれば、それはすでに一つの世界のうちに於いてのみ可能であるといはな

ければならぬ。物理的な斥力の場合、云ふまでもなく同一空間のうちにある物體についてのみその關係は成り立つ。これは力の關係よりも空間の方が先だといふ意味ではなく、斥力關係が一切のものに及んでこれを一つの世界に結びつけるといふことは、物體間にかゝる力の作用が存在することといふだけでは成り立たないといふ意味である。空間は、別れたもの、並存の媒介として、世界といふ共存の仕方に本質的に屬すると考へられるのである。

① Erdmann, Versuch etc. 4. 35.

ヘルバルトは、ライブニッツがモナッドについて、空間的關係の存在を前提してゐることから、モナッドが共存する空間があるとし、その空間は感性的空間ではあり得ないが故に、徹知的空間でなければならぬ、即ちモナッドは徹知者(神の如き)に見られた徹知的空間に於いて共存するのでなければならぬと云つてゐる(Lehrbuch zur Einleitung in die Philosophie, § 157)。ヘルバルトの空間論は示唆に富んだものである。彼は Ort を Sein の Bild と考へ、空間を獨立なる多くの Zusammenfassung といふことから考へてゐる。ある場合には空間を Möglichkeit der Zusammenfassung überhaupt と捉へてゐる。空間關係(Raumverhältnis)なるものは客體の眞の述語ではない。空間關係は諸客體の Bilder の、「いさ知性」の中の Zusammen treffen に基く。それは Schein であるが、主觀的な Schein ではなく、客觀的な Schein であるといふべき。

① Cf. Hauptpunkte der Metaphysik, § 7, Allg. Metaph. § 292 ff.

世界に於いてモナッドが共にある在り方と、神の知性あるひは何等かの一つの知性の中に於いてある在り方とはただちに同一視するわけに行かない。その意味からヘルバルトの徹知的空間といふものも、モナッドの世界性の解釋と

してはそのまゝ受とすることはできぬ。しかし獨立なもの、*Existenzen* が、その個物の何等かの性質に還元し得ないのである點は銘記すべきである。共存の可能にかゝはるといふ點で、空間と世界とは同一の原理的構造をもつのである。空間を一つの主觀の作用、例へば線をひくといふやうなことに基けやうとするのは誤りである。根本的な意味に於いて、時間的な構造をもつ作用とか働らきとかに空間を基けることは出来ない、ライプニッツは空間を同時的存在の次序と考へ、その *order* としての空間よりも、その關係の主體の方が存在論的に先行するといふのであるが、主體が多として共存し得るといふことはいかにして可能であるか。多の集まりの可能性そのものにかゝはるものは、その集りが表象される一定の仕方(表象された空間)に先行しなければならぬ。その點はライプニッツに於いても十分に考へられてゐるとは云へない。空間を物の *coextension* に基けることが一つの循環であることはカントの指摘した通りである(一七七〇)。(年の論文) 普通の直觀的空間は、カントのいふやうに感性的存在に限られる形式であるといへるが、非感性的なものといへども、多であつてしかも共存するといふ以上は、共存の場所をもたねばならぬ。

カントは、「形而上學はライプニッツ・ヴォルフ時代以來ドイツに於いて眞に如何なる進歩を爲したか」といふ論文の中で、世界の一體といふことが一つの空間によつてのみ可能だといふことを主張し、ライプニッツが豫定調和の概念によつて、「種々なる實體が協同して一つの全體を形成するといふ可能性の説明」をしようとした試みを最も不可思議な空想であるとしてゐる。之に反し空間の直觀を基礎とすれば、「總ての存在者は空間に於ける物として、共にたゞ一つの世界を構成し、離れ離れの世界は在り得なくなる、さうして世界の一體といふこの原理は、かの直觀を基礎とせず、純粹なる概念のみによつて導かれるとすれば、全然證明され得ないものである」と云つて居る(安倍、金子兩氏

八九頁)。によるこれは、感性的な世界について云はれてゐるのであるが、世界一般についても、その一體たることの可能のために何等かの *coexistence* の可能原理がなければならぬ。リーマンはユークリッド空間をその特殊の場合として含む

一般的 *Mannigfaltigkeit* の概念をたてた。その場合リーマンはすぐに、その計量的關係 (*Messverhältnis*) の考察にはいつてゐるが、さういふ計量的關係によつて規定する *Mannigfaltigkeit* に止まる必要はない。多の要素についての形式的な諸關係——形式論理學や一般集合論の如き——を考へることも出来る。そこで *universe of discourse* とか *Denkbereich* とか集合の又は對象一般の領域とかいふものが考へられて来る。しかしその領域についてある理論を樹立するといふやうなことでなく、それよりも根本的問題として、多が多として共に在ることの可能性が考へられねばならぬ。それが存在論に於ける世界の問題として基本的なものである。論理數學の形式的領域、物體界又は人間の社會といふやうな特殊な「世界」の研究がいつれかの特殊の世界だけの考察に止つて、一般的な或は「抽象的な」問題を忘れてゐる間は、まだ存在論として根本的な行き方とは云へない。

ライプニッツの世界の構造に於いて *ordre* と *duration* の二つの概念が重要な意味をもつ。元來ライプニッツは共同可能ポといふことをいふとき、結合 (*combination*) の考が基となつてゐる (Ⅲ五)。さうして可能的なもの、一定の結合の

概念は、必然的に次序の概念を含む (アルノーへの手紙Ⅱ五二參照) モナッドによる世界表現に於いては、常に表現の「立場」位置といふことが考へられる。 *Systeme nouveau* の中で、數學的點はモナッドが世界を表現する觀點であるといつたのは (Ⅱ四) 衆知のところであるが、點は位置をもつことを特質とする。ライプニッツの空間についての説明で最も注目すべきもの、一つは次の一節である (一七〇三年テ・ホルダ)、「私は延長が可能なる共存物の次序で、時間は同

時に存在することのできない可能的なもの、次序であると云つた。君は、もしさうなら、時間が總てのもの、物質的な物にも精神的な物にも係はるのに、延長はたゞ物體だけに屬するのは不思議だと云はれる。それには私はかうお答へする。兩者に於いて事態は同じである。何となれば、精神的でも物體的でも、あらゆる變化はつゞくもの即ち時間に於いてある一定した座席(シエジ)といふべきものをもち、同様に共存の次序即ち空間に於いて座席をもつのである。それといふのは、モナッドは擴がりはないが、擴がりのうちに「種の位置をもつ」(in extensione quoddam situs genus)といひかへれば、すべての他の共存するものに對して次序づけられた關係をもつ、さうしてそれはそのモナッドの支配する機械によつてなのである。物體から全く離れた有限な實體といふものは全く存在しない、従つて、宇宙のうちに存在する他の諸物に對して、何等の位置又は次序をもたないのは全くないと私は考へる。擴がつた物體は、その中に多數の位置を具へたものを含む、之に反し擴がりなき單純物は擴がりのうちに位置をもつ。——だが、現象に於ての如くこの位置を點的に(punktlich)指定するとは出来ない。」

モナッドをその「精神的」側面から考へ、その獨立性を強調するとき、その協同性は表象に於ける豫定調和といふことしかない。しかし物體と結びつかないモナッドはなく、その物體的側面から「次序づけられた關係」をみれば、位置といふ如き概念が成り立つて来る。その方面はむしろカントの考へてゐるやうな唯一の空間に於ける世界の統一といふことに近いといつてよい。實體は擴がりをもたないが位置をもつといふが、「點は位置をもつが、擴がりをもたぬ」(七三)のであるから、兩者の對應を考へることは不當でない。空間は位置の次序 in ordre des situations である(クラへの手紙)。ライブニッツが空間及び擴がりをもナッドの世界から遠ざけるのは、それが量的連續であるといふことによ

る。しかし位置の「體系」として空間を考へる場合は、普通の意味の延長とは異なる。

デ・ボスへの手紙(一七〇七年)には、「單純實體はそれ自身に擴がりはもたぬが、位置(Position)をもつ、位置は擴がりの基礎である、擴がりなるものは位置の連續的な繰返し(extensio sit positionis repetitio continua)だから」(三九)といつてゐる。我々はこのやうな説明に對して、言葉の上のあけ足とりをするよりも、その眞意を理解することを努めねばならぬ。宇宙を表現する無限數のモナッドは、同一のモティフの無限の繰り返しで、しかも空隙のない、「連續的」になつた、繰り返しと考へることが出来る。これは一直線のどの「場所」にも一つの點がありながら、各點がその一直線上に夫々ユニツクな位置を占むることによつて互に區別されるのにくらべることが出来る。その場合もし各點が線を表象するものだとすれば、それぞれ自己の位置から全線を表象するであらう。ライブニッツの云ひ方ならつて云へば、點の數があるだけ全線の表現があるわけである。多くの點がありながら、全線が一つの線であるのはこの内面的なつながりによる。

このやうな思想は決して偶發的のものではなく、一なるものゝ多としての遍在を考へる一つの根本的可能性である。プロティノスは「無限に延びるところの線が一點に依存し、そのの周りをめぐり、線がいかに遠くのびても到るところにかの動くことなき點が顯はされる」(六、五、一一)といつてゐる。プロティノスでは至るところに於いて顯はされる一なるものを本として考へてゐるが、ライブニッツではむしろ表現する各々の點が主とされて居る。線を點のUnionだといふ普通の考も、嚴密にいふならば、ある點から動きはじめるとか、線を「生ずる」とかといふやうなことはないわけであるから、一なるものが各々の位置に於ける點に宿る、又はそれによつて多様化して現はされると考へるべ

きであらう(二三三九、上の引用)。ギリシャ人は、點は位置をもつた^{ポシチ}と云つたが、一は點に於いて「可見性」と、多としてある可能性とを得るのである。そのやうな思想の系統について少し考へてみよう。

クザヌスにあつてもライブニッツと同様、宇宙は秩序ある多の一である。宇宙は、無限にして真に一なるもの。即ち神の展開(explication)であるが、展開によつて、それ自身としては多と可見性を越ゆるところのものが、多として、しかも調和的に聯關せる多として現はれる。この聯關せる多が宇宙である。宇宙に於けるあらゆるものは、それぞれのものに於いて異つた仕方で(in quodlibet sit diverse)、凝縮した(contracte)宇宙としてある(De docta igno. 同一の宇宙がそれぞれの個物に於て各異つた仕方であることは、いかなる個物も總てを總てとして含むことを得ないと共に、他方には各々のものが替へがたい獨自性をもつ)とである。ut nihil sit in universo, quod non gaudeat quadam singularitate, quae in nullo alio reperibilis est. (D. igno. Ⅲ, 1) 然して神は、その展開であるところのすべての物に於て、真理が映像に於ける如く(sicut veritas in imagine)像として多様化せられる(Ⅳ)。あらゆる被造物は同一なるものを異つた仕方^②で表出する(differenti repraesentant)。諸々の被造物は異つた仕方^③で曲つた鏡の如きものであるが、精神をもつものは曲りの少ない鏡で、「生きた自由なる鏡」(specula viva atque libera)である。神と世界の complicatio-explicatioの關係はそれ故に、「宇宙は見えずる神の示現であり、神は見ゆるもの、不可見性である」(Quid est mundus, nisi invisibilis Dei apparatus, quid Deus nisi visibilium invisibilitas? とはされるのである)。

① Cf. E. Hoffmann, Das Universum des N. v. Cues. Sitzb. d. Heidel. Ak. d. W. 1930. S. 14 ff.

② D. Mahnke, Urenethliche Sphäre und Allmitlepunkt, S. 101 ff. 244.

③ Cf. J. Bernhart, Philos. Mystik d. Mittelalt. S. 224.

神、宇宙、個物に於ける complicatio—explicatio の關係を象徴するものとして、クザヌスは一と點と線との關係をとつて居る。多と現象性とを超越した無限なる一の、世界への展開は、それ自身としては我々の認識を越える (De fin. 3.) が、數學的記號を通して之を象徴的にうかがうことが出来る。點と線との關係による例示は、De Berylio の中にも、また Ithola De Mente の中にも出てゐる。點は一の不可分性の映像である。「一を不可分にして、傳達し難き真理で、相似なるものによつて自己を示現し傳達しようとするのだと假定すれば、一は記號的又は圖形的に自己を定立し、かくして點が生ずる」(Über den Beryll, Thrs.) 線は點の展開である。線はいかに分つても、常に線としてある。即ち線は線であることに於いて、一種の不可分性をもつ。線は點の不可分性を分有する。點は線、面、立體から離れては存在はしないが、これ等のものに不可分性を與へる内的原理である (同)。クザヌスは線の至るところに點があり、しかもたゞ一つの點しかない、その點の evolution, explicatio 又は extensio が線なのだといふ (De doct. ign. II, 3.)。線の中に至るところ二つの點がくりかへされてゐる (nihil in linea reperitur nisi punctus ubique) といふことを、運動が靜止の、時間が今の展開であること、同一の事態として解してゐる。線の上にくりかへされてゐるものは、唯一の點そのものではなく、それぞれの場所に於ける點の像であることは明かである。クザヌスは、運動に於てくりかへさる、靜止を、系列にならべられた靜止 (quietes scintillati ordinati) だとしてゐる。くりかへさる、多くの「點」の一なる點への關係は分有 (participatio) に外ならぬ。一なるもの、extensio は質料的可變性によつて成り立つといふ。質料化された一々の點は、たえず異つたものとしての點であり、しかも點である限り一である。その連續的な異多と一との結びつきが「順序づけられた系列」なのである。前に、個物が夫々獨自の異つた仕方て宇宙の凝縮であるといつた關係は、

一なるものがたえず異つたものに於いてあり、しかも連続的につながつてあることなのである。點と線との關係に於いて、このたえず異つてあるものを、質料といふ考から離れてみれば、位置に外ならぬ。唯一不可分の點がたえず異なる位置に於いて現はれるわけである。この位置といふ思想は、私の知る限りではクザヌスにあつて十分表明化せられてはゐないやうであるが、*repetitio* 及び系列の概念のうちにはすでにそれが含まれてゐるとみてよからう。

無限なる同一者は、他のものには夫々に異なる仕方で受け容れられる。それであるから、多様化されることのない無限者は、多數の異なる仕方の受容を通して、よりよく自己を展開し表現する。*multiplicabilis infinitas in varia receptione melius explicatur; magna enim diversitas immultiplicabilitatem melius exprimit. (Adrota de sapientia, I.)* クザヌスが、宇宙を神と個物との中介的な位置におき、宇宙をもつて神の展開とし、多様なものは一なる宇宙を介して神のうちにあるとするのは (*De fin.*)、上記の意味から理解できると思ふ。有限なる存在物は夫々に異なる仕方のうちのため、一つの仕方で神を表出するにすぎないから、神性のより完全な表出は、かゝる個々の表出像の限りなき多數——しかも秩序ある聯關をもてる多數のうちに見出されるわけである。各個物に於いて宇宙は *contractum* として現實に存在するが故に、「宇宙の中にある神が各個物の中にあること、なるのである」(*De fin.*)。クザヌスにあつては、普遍と個物、宇宙と個體とは不可分の聯關をなして居るのである。「宇宙とは普遍を、多なるもの、統一をいふ」(同上、第四章)。さうしてまた「宇宙は、その部分たる總てのものなしに、一であり全體であり完全であり得ない」のであつて、宇宙の部分たる存在物の總ては宇宙と同時に存在に入り來つたのである(同所)。それにもかゝらず、宇宙は *contractum maximum* で一つであり、すべてに於いて諸物の具體性に於ける原理で目的であるといはれる同。

以上述べたところからもわかるやうに、クザヌスに於ける宇宙とライブニッツのそれとが個體との關係に於いて、多くの類似をもつと共に、兩者の間に存する根本的な相違もまた見逃すことはできない。實無限的な「集まり」としての世界の概念はクザヌスにはない。モナッドの總體は *totum* でなく *aggregatum* で、單一體は集まりに先だつていふ考は、クザヌスには見出されない。クザヌスに比較すれば、個物の獨立なる實體としての存在性と、個物の世界なるものの特有な意味はライブニッツに於いて一層強く、また新しいものといはなければならぬ。このことはブルノーに對しても云ひ得るであらう。ライブニッツの世界概念の特質は、それが *Kombinatorik* の考に基いてゐることである。ここでは單一なるものが複合に先だつ、クザヌスはプロティノスの「流出」に比して、階層的な中間段階の實在性を否定する點は異なるにしても、多の成立と次序とを全く一なるものへ分有、あるひは全一なるもの、凝縮又は具體化の仕方の相違に基ける點は、新プラトン哲學の傳統に従つてゐる。クザヌスでは、宇宙は一つの全體で個物成立の媒介の意味をもつ。あらゆる個物は宇宙のある仕方での、夫々異なる凝縮であるから、宇宙そのものはそれ自身個的全體（普遍的個物ともいふべき）で個物よりもすぐれたるもの、とせられる（参照）。宇宙は太陽でも月でもないが、太陽に於いて太陽であり、月に於いて月であるところのものである。それは個物に先だつて個物の存在しない前にあるのではないが、原理であり最大なるものなのであつて、神からの單純なる流出によつて (*per simplicem emanationem*) 存在にもち來されるのである。宇宙なるものが媒介する一全體なのであるから、多數個物の調和は當然である。クザヌスでは、個物は豫定調和を必要とするほどに獨立性をもたないのである。

① Cf. Hoffmann, *op. cit.* S. 10, 16, 35.

端に達することはない。同一の種に屬する異つた諸個體の間には完全性の度が必ず存するのである(三ノ一)。こゝで程度及び終端といふことは完全性の度に關して考へられてゐるのであるが、個體の多としての存在の仕方を問題としてゐる我々としては、その點にこだはる必要はない。

contractum としての存在、程度的なる存在物そのものに、多として、無限として、完全な限定性あるひは完備性をもたないといふ存在性格が屬せしめられてゐるのである。具體的なるものも、無限であるが、完成的に無限ではない。被造物としての存在の無力性がそれを許さないと考へるのである(三ノ一)。いづれにせよ、個物の多といふことからみた宇宙の無限は、クザススではライブニッツが非實在的と考へた連續の構造をもつ。これはクザススに於ける程度のなる存在としての個物なるものが、ライブニッツの意味での「實體」性をもたないことに外ならぬ。この比較によつて私は、ライブニッツの世界及びモナッドなる概念の特異性を一層よく把握することが出来ると思ふ。クザススの「具體物」の世界は、その不定性、程度的性に於いて經驗的なるものゝ構造をもつ。實體としてのモナッドはさうではない。私は之をライブニッツの無限の概念を手がかりとして論明してみようと思ふ。

不定的進行の形に於ける無限をライブニッツは觀念的だとする。かゝるものは彼によれば實體の世界の構造には屬しない。そのやうな無限は物體的連續の構造に屬する故現象的である。微分法の基礎を論ずる際には、ライブニッツもたゞこのやうな生成的過程的無限のみを考へてゐる(ハルスキーとの文通、カッスラー・ビュツヘナ)。量に關する限り、彼は一貫してこのやうな無限のみを考へてゐる。連續を規定するに當つても、いかに小さな間隔にも要素が含まれてゐるといふことをもつてしてゐる。彼の「連續の原理」がまたこのやうな不定進行の無限に、即ち有理數的稠密性のタイプ

に係はることはない、これがライブニッツに於ける第一種の無限である。

次に、モナッドの實無限の概念がある。前にも云つたやうに、不定的に減少する部分に對して、モナッドは點に比すべき超越的な無限の意味をもつてゐる。普通、數學では無限系列の極限といつても、ある系列が「極限をもつ」といふことの定義をするので、これは系列そのもの、性質に求められるが、極限自身は系列の外にある。従つてそのやうな定義によつて點なるものを「つくり出す」とは出来ない。點が線の部分でない如く、單純實體は延長あるもの、構成部分ではない。モナッドの總體を *monium* でなく *monium* であるといふとき、後者の無限はあらゆる與へ得べき數を越えるがしかも不定的のものではない。前に私は單純實體は、不定的な無限過程に對して、その完成の意味をもつと云つたが、その點から考へればモナッドの世界は、我々の到達し得るものの程度的擴張の範圍内にあるのではない。その意味で一種の超越性をもつ。その超越性は、ライブニッツに於ける實體の現象への超越性と同一タイプのものである。

第三の無限は絶対である。「眞の無限は嚴密に云つてたゞ絶対者のうちにのみある。このものはあらゆる合成に先だち、部分を加へ合せることによつて作られるのではない」(「悟性新論」^{IV}一四四)。眞の無限は絶対であつて *modification* ではない、それを様態化するれば之を制限し有限とする(同)。また、デ・ボスへの手紙では、無限を神と同一視してゐる。

「絶対者と分つべからざる無限のみが眞に一といふ性をもつ、これが神である」(II三)。神は分つべからざる無限者として二であるが全體ではない。 *Solum infinitum impartibile unum est, sed totum non est; id infinitum est Deus.*

(II三)。なほ、この手紙(一七〇六年)に添へられた紙片には二種の無限を分つてゐる。まづ、どこまでも増進して止ら

ぬ infinitum syncretesorematicum と infinitum hyperatesorematicum (これは神である)とが存在するとし、次に Datur etiam infinitum actuale per modum totius distributivi, non collectivi. Ita de omnibus numeris aliquid enumerari potest, sed non collective. と書いてゐる(所同)

現實にあるものは整数が二から構成せられてゐる如き構造をもつといふ建前からすれば、モナッドの實無限に對應して、單位數一の實無限があり得るわけである。たゞそれが總體として定數をなきぬといふことは、數を定める又は數へるといふことが人間の逐次的進行の作用であることから考へて理解出来なくはない。ライプニッツに於ける totum は部分を加へて到達した限定體である。カントが繼次的綜合が決して終結に達しないと考へたのもかゝる認識の仕方關してである。いづれにせよ、全體なるものはライプニッツでは部分を寄せ集めた總體といふ構造のもので、この構造自身が有限的認識に對應するといつてよい。それで、ライプニッツは、事物の本性上からは、數の無限といふことも不可能ではないとする。しかし、それは神の精神に於いてのみ存在するのである。Nec enim negari potest, omnium numerorum possibilium naturas vovera dari, sicut in divina mente, adeoque numerorum multitudine esse infinitam. (II^三 (〇五))。之と對應して世界も一全體ではないが、無限である(所同)。

整數的構造をもつモナッドの集まりにあつては、單一なものが複合體に先だつ。しかし、絶對の無限は有限に先だつのである。連續に於いても全體が部分に先だち、部分はその分割によつて成り立つ。有限なるものが何等かの意味で絶對者の部分と考へられるならば、絶對の無限と有限存在との關係は連續的全體とそれの部分の關係に對應するといふことになるであらう。しかしライプニッツはつきりと之を否定する。絶對を全體とし、その何等かの仕方による限

定として有限物乃至個物を導き出す如き見方を彼はとらぬ。かゝる立場は個物を様態化するものとして排斥するのである。全然不可分な、眞實に一なる絶対無限と、單一不可分の實體の無限多の集合としての世界と、不定的に分ち得る現象的あるひは觀念的な全體としての連続とはライブニッツに於ける三種の存在性に應ずる三つの無限である。

神は至るところ中心であつて、一切のものが直接神に現前してゐる(原理)といふとき、これは明かに神の遍在の思想である。また、空間に關しての絶対者の觀念は神の *immanence* に外ならぬとも云つてゐる(四五)。神は全く不可分の一であるが、その遍在といふことを考へる限り、やはり一種の可分的ならぬ連續性を拒否出来ないのではないか。絶対の無限は單一體の多に先だつのである。神の *immanence* と永遠性とは被造物の持續や延長よりもずつとエミ

ネントなものだといふ(クラークの第五書簡)。連續性又は延長性を神から遠ざける理由は、延長が互に外的な部分をもつことに

ある。擴がつてゐる限り不可分とは云へないと考へる。スピノザは延長を神の屬性としたが、スピノザの延長は不可分な無限である。延長をもたぬものとして、一方に「小なる神」としてのモナッドと、他方に絶対無限としての神とがあるわけであるが、宇宙あるひは世界はそれ等のものゝやうな意味で一であるとは考へられない。それ故に多であり集まりであるといふ。世界は多であつて、しかも、その多が内的につながつてゐる、一つに集中するところの表現の多であることに於いて、一つである。神、モナッド及び世界の關係をライブニッツは次の如く説明する。「神は宇宙を優勢的に含み (Dieu contient l'univers eminent)、精神又は一なるもの (l'Unité) は之を潛勢的に (virtuellement) 含む。精神は中心の鏡で、しかも能動的な、いはゞ生きた鏡なのである(三七)。個々の精神自身も一つの世界である。モナッドの内容は宇宙そのものゝ秩序と對應する。世界はモナッドに於いて表現の主體をもち、そこで夫々の觀點から無限

の多様な線りかへしに於いて表出される。ライブニッツはあるといふことは一つであるといふことだといふが、それによれば世界の存在性は、無限に多様化しつゝ、對應と、變化の「連續性」とに於いて一つとしての意味をもつところに存する。モナドの集まりを包むものとしての世界といふものはない。之に對し、モナドと神とは夫々の仕方世界を包む(又は包む)といふ。世界が神に於いてあるのは、その「源泉」に於いてあること(單子論三)で、モナドに包まれてゐる仕方は、表現され凝集されてゐることである。しかしいつれにせよ、單に多としてあるのでなく、一に包まれてあるのである。

無限多のモナドは、一々異つてゐる。その相違は表象の判明さの相違によるといはれる。これは一方からいふと等級の差であるが、しかしたとへ判明さの度に相違なくとも、判明な部分が異なることもあるわけである。モナドは一方では人間の精神へのアナロジーによつて考へられる。モナドの作用は表象の作用である。モナドの表象と意欲とは神の知と意志にくらべられ(單子論四八)、諸實體の神への依存と實體からの思想の流出とが比較せられる(敘説三十二)。しかしライブニッツのモナドは、人間精神又は人間としての個體からのアナロジーだけで考へられるものではない。モナドの従つて世界の「物理的」な側面を忘れてはならない。モナドの宇宙聯關にはその受動性が重要な役割を演じてゐる。その點を明かにすることは單子論の正しい理解のために非常に大切だと思ふ。單子論六一、六二には次のやうに説いてある。

凡てが充實してゐるのであらゆる物質は聯結してゐるし、充實空間の中では凡ての運動は隔つた物體にも距離に應じて効果を及ぼすから、各の物體はそれに接觸する物體の影響を受けてそこに起る凡てのことをどういふ風にか

感するばかりでなく、又それらのものを介して、各物體に直接觸れてゐる物體の影響をも感ずる。その結果、この交通はどんな遠いところへも達するといふことになる。……然し精神は自分自身を見てもそこに判明に表現されてゐることしか讀みとることが出来ない。精神は自分の變を一度にすっかり展開することはできない。その變は無
限に及んでゐるのである。

かういふ譯で、神に造られた單子は夫々、宇宙を表現してはゐるが、特にその單子の用に宛てられてゐて、その單子を自身のエレレケイアとしてゐる物體を殊更判明に表現する。さうして、その物體はあらゆる物質が充實空間の中で結合してゐるものであるから、精神は特に自分に屬してゐる物體を表現することによつて同時に宇宙を表現する(河野氏譯による。尙「原理」三及び十三、彼説三三参照)。

こゝで無限なる宇宙のモナッドによる表現の可能に對して、空間に於ける物質の充實といふことは見逃すことのない役割を演ずる。ライブニッツに於いて、モナッドの個體的獨立性といふことは、結局人間精神の又は人格の個別的獨立性といふことを思想的動機としてゐるとみてよい。しかしモナッドの「物體性」の側面からみれば、物體の連續性といふことがその「宇宙性」を土臺つけてゐる。この方面を重視し、少くとも質料形相主義の考方に従つて兩側面に等しい重みをおくとすれば、一つの別れた世界としての單純實體なるものは餘程問題的とならざるを得ない。これは物體的なるものに實在性を認めることを必要とする生物現象について我々のみたくところである。いまはさらに無限の概念についての難點を考へなければならぬ。現實に別れてゐるといふことは度合ひといふものを考へる立場とやかに調和するか。物質的連續によつてモナッドが一つの世界につながるるといふ側面は、ライブニッツのアブリオリな神學的

思辨を経験科學的に補ふものとみるべきで、表現の遠近法的連續といふことも、これなしには精密な意味を得ることは出来ない。表象の判明さの度合ひとといふ如き心理學的な概念は、それ自身としては全く經驗的のもので、無限の概念と結びつきようはないのである。判明さの程度といふ如きものに對しては、識別し得る得ないといふ標識があてはまるとせねばならぬが、識別し得ないものが同一だとすれば、クザヌスのいふ如く、無限に小さい程度の差は程度の差がないといふことに外ならぬ。そのやうな經驗的程度的な不定性を脱して、實無限的のモナッドを考へるには、位置をもつ點の數學的連續の思想による外ないであらう。表象するモナッドの實無限多の連續といふことは、物體原子の概念を媒介として、之を構造的には數學的無限に、存在性の上では形而上學的モナッドに「完成」せしめたものとみてよいであらう。そこにライプニッツ哲學の假說的といはるゝところがあるのである。かゝる無限への完成に思想的あるひは世界觀的支柱を與へてゐるのは神の概念に外ならぬ。それ故に、エルドマンの主張する如く、ライプニッツの存在論が、有神論的な神の概念を除けば、一つの齋合的な全體であつて、神の概念をかりることなしに純粹なハルモニスムスとして仕上げるべきであつたといふやうなことは、我々の賛同しがたいものである。ライプニッツのモナッド世界なるものはどこまでも「神の數學」(mathesis divina)の考によつてゐるもので(Ⅶ三)、「神が計算し認識を行使するとき、世界がつくられる」(Ⅸ一)といふことは、ライプニッツの存在論に於いて本質的意義をもつのである。その意味に於いてのみ數學的合理性が實在的意味をもつ。共同可能的なる、存在する世界は神の完全なる數學的設計に基くのである。また他方からいつて、個體實體及び豫定調和なるものが、「神は能ふ」といふ基礎づけなしには理解し得ない性質のものである(單子論、(五一參照))。

神に基く合理性といふ豫想を離れて、認識論的又は現象學的な考察からもモナド論的な世界といふものが考へられる。多數の認識者に共通なる世界といふものを考へる場合もさうであるが、一般にバースベクティビズムともよばれるべき立場での世界の概念は、本質的にモナドロジの構造を示すのである。例へばフッサールの如きも、多數の認識主體(自我及び他我)に共通なる客觀的世界の存立が、その先驗的構成に於いて、諸モナドの調和、即ち夫々一つを中心から世界を環境的現象としてもつ自我(モナド)の多數が、共通の間主觀的對象世界をもつといふことに基くことを示さうとしてゐる。しかしこのやうな現象學的モナドロジにあつては、世界はモナドの共通の對象界であつて、世界そのものが無限なるモナドの集まりと考へられるのではない。フッサールは、現象學的單子論が、經驗の世界が我々にとつて存在するといふ事實そのものに含まれた志向的内容の開陳であるのに對し、ライブニッツの形而上學的單子論は、諸單子の調和といふ形而上學的 *substructure* をもつ假説的なものであるといふ。ライブニッツの形而上學的假説的と考へられる性格は、人間のモナドと、主體的に考へられた、單なる對象でない「自然物」とを一つの世界のうちに含ましめるところに存する。モナドを人間に限つて考へれば、モナドの實無限といふやうな思想は成り立たない。ライブニッツの單子論は物體界の原子的構造に對應し、原子論をより高い立場に止揚する(ライブニッツの意圖の上で)自然哲學を含むのである。ラスウイッツは、ライブニッツの單子論は當時の質的又はペリバトスの原子論の影響を受けたものだとしてゐるが、その説の歴史的當否は別とし、何等かの意味で原子論の媒介をもつことは否定出来ないであらう。それはギリシアに於けるプラトン哲學の原子論への關係に比較することが出来るであらう。いづれにもせよ、物體界の基礎又は實體をなすモナドと、人間の自我としてのモナドとは、いづれも同一なるモナド

下世界の成員として考へられて居る。そこには恐らく、スコラ哲學に於ける *analogia entis* の思想、即ちあらゆる被造物はひとしく神につくられたるものとして、どこかに神の印刻をもち、全存在界にわたる類同性が存するといふ思想がとり入れられてゐるものと思はれる。

① Husserl, *Méditation Cartésienne*, Cinquième Axi.

② K. Lasswitz, *Geschichte der Atomistik*, II, 194-195.

ライブニッツに於ける世界は、單に多數のモナッドの共通のノエマではない。しかしどこまでも創造されたもので、世界は成員たる單子に於いて自發的に働きはするが嚴密な意味でそれ自身創造的ではない。モナッドは神の外にあるとされるのである(三七一)。

さきに私はモナッドの個體的獨立性の問題に關して、モナッドの能動性の程度的であることから、個體化といふことにも程度を考へるのが現象學的立場に適合するであらうと云つた。この場合現象學といふのは、漠然と、最も廣い意味での經驗(右限的な認識)との原理的なつながりを越えない立場といふほどの意味であつた。之を無限の問題について云へば、不定的進行の形に於ける無限は、明かにかゝる意味で現象學的な無限である。數學に於いて、概念の直観による充實の原理的可能性といふことを存在性の條件とする直観主義者の認める無限はかゝるものである。ライブニッツ自身も微積分法の基礎としてはかゝる無限で足れりとしたことはすでに云つた通りである。これに對して、人間の認識による到達の可能を全く度外視して、無限なるものをそれ自體として存立すると考へる立場を數學者は、ある場合「神學的」とよんでゐる。モナッドの實無限なるものは、その意味で「神學的」のものといふべきであらう。

ライプニッツは、無限の觀念は同一の理由 (*ratio*) の存立に基き、その根源は必然的真理の根源と同一であるといふ。さうしてこの無限の觀念に完成 (*accomplissement*) を與へるものは我々自身のうちにあるといふ (悟性新論、三十三章) しか (彼によれば、我々の觀念は能力としての存在性をもつもので、我々の精神は宇宙を潜在的に含むにすぎないのだから、我々自身にこの完成をもち來らしめるものがあるとは考へられぬ。モナードは「無限を有限的に表現する」(ペイルへの答辯)。しかし「我々の中に於いて限られたるものを制限なく考へることによつて」我々自身の反省から神の思想に至るともいふ (單子論、三〇) 無限の完成といふことはかゝる仕方に於いてなされると考へる外ない。

必然的真理の源泉は神の悟性である。ライプニッツは空間に關しても、「空間は一つの次序ではあるが神がその源泉だ」といふ (三七)。無限はその完成態にあつては、あらゆる過程性・潜在性を越えたところに於いてのみ可能である。前に述べた如く數の無限はたゞ神の精神のうち (*in divina mente*) のみあり得るといふ。この場合の無限の數は可能なる一切の數を意味するところ、一七〇七年の *Epistola ad Hanschium de Philosophia Platonica* (Opera, Erd.) では、プラトンの多くのすぐれた教説の一つとして、「神の精神のうち」に「徹知的世界がある」といふのをあげ、それを自分も「觀念の領域」 (*regio idearum*) とよびならしめてゐると云つて居る。單子論四三で、神の悟性を永久真理の *region* とよんでゐるのも同じ意味である (cf. Theod., I, 20-21)。モノにあらゆる生成・過程を、一般に時間性を全く超越した領域が、完成せる無限の領域としてあるわけである。この徹知の世界としての「觀念の領域」に於ける無限は、あらゆる發展性作用性を脱したものと考へねばならぬ。私は、この領域に於ける無限なる本質 (永久真理と本質とは同一視) (されてゐる——單子論四四) の共存の仕方方を徹知的 *Manificatheit* として性格づけてよからうと思ふ。ライプニッツに於いては、徹知的領域に於いても多は

多として存立する。その故に神の悟性が¹⁾と考へられるのである。無限なる本質の多様が平等的に含まれ、その適合不適合の關係が認知される場所となるものが神の悟性に外ならぬ〔事象の根本的起源 III 三〇五参照〕。辯神論には次のやうにいふ。

Dans la region des vérités éternelles se trouvent tous les possibles, et par conséquent tant le régulier que l'irrégulier; il faut qu'il y ait une raison qui fait préférer l'ordre et le régulier, et cette raison ne peut être trouvée que dans l'entendement. De plus, ces vérités mêmes ne sont pas sans qu'il ait un entendement qui en preme connaissance; car elles ne subsisteroient point, s'il n'y avoit un entendement Divin, où elles se trouve réalisées, pour ainsi dire. (Theod. 1)^o § 189

① Cf. Heimsoeth, Leibniz' Weltanschauung als Ursprung seiner Gedankenwelt. Kant-St. 1917 S. 375.

「すべての可能なるもの」 tous les possibles が一領域をなすといふことか、その領域は何か特定の原理による統一をもつことは出来ない。いかなる統一にもせよ、その原理が限定し得る限りそれに含まれない可能者があるからである。

あらゆる可能な觀念の總體なるものが、その總體に何等かの「内包」的限定をもたしめる限り矛盾に導くことは、集合論の逆理に於いて我々の知るところである。ライプニッツが果してこの事態の洞察をもつてゐたかどうか。可能といふのは、ライプニッツによれば矛盾を含まぬことであるが、矛盾を含まぬものが統一ある一全體をなすといふことが云へるであらうか。單純なるものは矛盾を含まず、相互に獨立なるものは互に矛盾することはない。しかしそのやうなものを一全體にまとめるべき原理は何であるか。ライプニッツは、「可能なるものとは、完全に思念し得るもの (parfaitement concevable)」、従つて一つの本質、一つの觀念をもつものをいふ」とも規定して居る(III 五)。思念し得

るものは思念し得るものとして一つに統一され得るのではないかと云ふであらう。あらゆるもの、可能なるもの及び不可能なるもの、絶對的總體があらかじめ一義的に與へられる或は完成的に「ある」とすれば、それについて思念し得るものといふ領域を限ることが出来るかも知れないが、この條件が充たされるといふ保證はどこにあるであらうか。完全に思念し得るものといふ概念は一つの定まれる概念であるから、その外延も一定してると考へられるかも知れない。しかし概念として定つたものか否かは、外延が限界づけられるか否かによつて定まるのではないか。所謂「外延不定」の概念は一つの領域を定めぬ。

ライプニッツが早い頃(七六)、スピノザに示したといはれる論文の中で、「すべての完全なるものは相互に兩立し得る、あるひは同一の主體のうちに存在し得る」といふことを證明しようとしてゐる(六二)。しかしその證明は、*omnes perfectiones* といふ概念そのものが正常な概念であり得るかどうかの吟味を怠つてゐるのである。後年ブルゲに與へた手紙(四七)では、多數の宇宙はあり得ないといふブルゲの説に對して、可能と共同可能とを區別し、もし宇宙なるものがすべての可能なるもの、集まり(*la collection de tous les possibles*)だとしたら、その説の通りであらう。しかしすべての可能的なるものは共同可能ではないのだから、その説は成り立たぬと云つて居る。ライプニッツの *compossible* といふ概念は十分明瞭でないやうに思はれるが、一定の基本的な法則群と調和する・可能なるもの、體系と考へてよいであらう。共同可能なるもの、總體は一つの世界をなす。可能なるもの、總體は、しかしかゝる一つの體系をなさない。世界を構成する無限の成員には「位置の次序」といふことがあり得るが、多數なる可能世界に屬するもの、「總體」にわたる次序なるものがあるとは云つてゐない。一つの知性の中に「實現」され得るものとして、可能的なるも

のはすでに何等かの限界づけをもつと考へられるかも知れない。可能なるものに對して不可能なるもの、觀念といひ得べきものに對して觀念ならぬものは除外されねばならぬと考へられる。しかしその可能といふこと、觀念であるといふことが、何か限られたものであるなら、之に包含されないものもより廣い領域に於いてまたやはり一種の可能であり、觀念であるといはねばならぬ。かくして可能といふもの、領域を何かの仕方で限るならば、限りなくそれを越える領域が定まり、領域の不定無限の重層が成り立つ。これ等の限りなく展開し行く領域の全部を包む一つの領域なるものがあるかどうか。ライブニッツは、原始的可能性 (*prima possibilis*) といふ如き概念を用ひてゐる (二五) ところからみて、分析及び綜合の方法に豫想されてゐる要素的なる本質を考へ、そこに結合法的定義による觀念界の組織を考へてゐるのであらう。しかしそのことに可能であるかは全く示されてゐないのである。

ライブニッツでは、「觀念の領域」といふ中性的な概念が、神の悟性として性格つけられることによつて、積極的意味を得て來る如くに見える。神の悟性は本質の源泉 (*a source des essences*) である (*Théol. 1. § 70*)。神なくしては可能的なるものもあり得ないといはれる (四三) (單子論)。本質が神に依存する仕方はいかなるものであるか。一方では神の本質が可能的なるもの、源泉だ (四一) といはれ、原始的可能 (*prima possibilis*) が神の絶對的な屬性と同一視されてゐる (二五) が、他方には後に述べる如く、可能なる本質は神によつて産出されたものではないと考へてゐる。しかしそれについて考察するのが今の私の目的ではない。神の悟性の中に無限に多くの可能的なるもの又は觀念が共にある在り方を考へてみなければならぬ。神に於ける意志の優位を認める立場では、それを作用の無限性に基ける。神の無限な力によつてあらゆることが可能だとする考へ方がある。しかしライブニッツはそのやうな考へ方はしてゐない。窺知

的世界といひ *mon* といふのは、共存の場の意味をもつと考へられる。ライブニッツは、神が精神の場所である (*Dieu est la place des Esprits*) とし、イブニツランシの見解にも理解を示し (VII 五)、また、神が事物の場所である (*Dieu est le lieu des choses*) とし、考に對しても、もしさうだとしたら場所はあらゆる作用を缺くところの空間 (*l'absence*) より以上のものでなければなるまいと云つて居る (三六)。即ちその思想を全く否定はしてゐない。しかしこれはもとよりライブニッツが觀念の領域としての神の悟性を、文字通りの「場所」と考へたといふことを意味するのではない。彼はどこまでも場所は擴がれるもの、部分をもつものと考へ、また空間は單なる關係又は次序であると考へる。その場合にしか次の如きことがいはれる。私は觀念の領域に於ける無限なる觀念を徹知的 *l'entendement* とよび得るといつたが、その多様はすべてが「一つ」の世界としての系列乃至次序に屬するのではない。選擇的に共同可能な世界を組合せるにも、一つの世界に全部の可能なるものを編み入れることは出来ない。即ちその無限多は系列づけられ又は次序づけられるといふ仕方では共存するのではない。各々の世界はそのやうな「無秩序」の多様から、秩序ある結合として選出されるのである。それならば、それらの一つの世界、一つの次序に屬しないもの、すべてとは何を意味するのか。いかなる仕方ではそれは總體であるのか。場所といふことは、普通には特殊のものに限つて考へられてゐるが、感性的であらうと徹知的であらうと、擴がつてゐるやうが不可分であらうが、その基本的性格には一貫したものが認められるのである。それは平等なる共存、何かの現實の次序とか組織とかに依存しない共存の場たるところにある。空間そのものは本來開放的な中心もなく周邊もない無限で、あらゆる限界づけはその中に成り立つのである。すべてを包むものといふ思想は哲學に於いて稀有のものではないが、その場合無限に關するアボリアを十分に見てゐるのは少ないやうである。

ライプニッツは同時存在の次序としての空間を世界に實在するモナッドの關係の抽象と考へた。彼は、デ・ボルダーへの手紙に「物體から全く離れた有限な實體といふものは全く存在しない、従つて、宇宙のうち共存する他の諸物に對して、何等の位置又は次序をも有たないのは全くない」(Ⅷ上)といふ。宇宙に共存するものは、定まつた位置又は次序をもつが故に、かゝる宇宙の次序としての空間といふものが抽象的に存立する。それは可能的宇宙の次序と考へられる。空間といふものがたゞそれだけのものなら、次序的な組織のない即ち一つの世界をつくることなき可能なるもの、總體の共存の場とはならぬ。實際またライプニッツは、可能なるもの、共存に關して、場所とか「空間」とかを考へてゐない。寂知的空間といふやうな概念も彼に於いては、積極的にみられてはゐない。彼に於いては、空間を物の如く、對象化して考へる考方に對する反對と警戒とが強い動機となつてゐるものと思はれる。その點で空間を形而上學化した同時代の多くの思想家と異なる。しかし單子論に特有なるパークベクティビズムは空間的表現を用ひることなしには説明されない。至るところにそれは用ひられてゐる。彼の哲學の世界性、モナッドの共存の世界性のためには、實體の整數的構造を考へるだけでは足りないのである。ライプニッツは、一數は形而上學的圖形で、算術は宇宙の靜方學である」といふ言葉を誌してゐる(Ⅷ四)。しかし「自然及び恩寵の原理」の十三節には、*Dieu seul a une connaissance distincte de tout, car il en est la source. On a fort bien dit, qu'il est comme centre partant; mais sa circumference n'est nulle part, tout lui étant present immédiatement, sans aucun éloignement de ce Centre.* (傍線)と云つてゐる。こゝでライプニッツが tout といふ語を何度も用ひてゐるのは偶然ではない。數は働くもの、精神的なるもの、時間的なるものを現はし、また秩序の原理でもある。しかしこのやうなものとしての數に余といふ意味は求め

がたい。ライブニッツの哲學は individualism, spiritualism であるが、同時に無限の哲學であり世界の哲學である。世界は個の集まりと考へられ、能動的に世界へのつながりの契機をになふものは個である。しかし個をして世界的ならしめる根據は彼にあつては、個を越える全としての神である。しかし神はそれ自身の悟性の創造者ではない (Theod., p. 380)。諸々の可能なる本質又は觀念なるものは、神がその意志の作用によつてつくり出したものではない (三五節)。諸々の可能なる本質は、それ故永遠のもので、これ等のものは可能的なるもの、觀念的領域の中に、即ち神の悟性の中にある。世界として結合さるべき終極の要素たる多數なる本質は、神の世界創造に於いて組み合せられるべき可能的なるものとして神によつて見出さるゝものなのである。神はたゞ出来るだけ完全な組合せに存在を與へ、それを時間的な存在たらしめるにすぎぬ。それ故、神はその悟性に關する限り、多を絶する一としての全ではない。

神による最もよき世界の選擇が可能であるためには、可能なるもの、無限なる組み合わせが一つの場面に於て全體として見とゞされねばならぬ。そこに「觀念の領域」としての神の悟性といふ概念が成り立つ。意志し創造する神に依存しないといふこのやうな悟性の領域を考へることは、世界の存在の根底に數學的な合理性を認めるライブニッツにとつて不可避のことであつた。ライブニッツの神の考へ方のうちに、我々は彼の世界の考へ方がはいりこんでゐるのを認めることができる。